

第九講 ネオダモデイス、モタケス、トロフィモイ、ノトイ（ノート）

ネオダモデイス：

Hesychios, s. v. neodamodeis：

「ネオダモデイス：遺言によってヘイロタイから自由になった人々」

Pollux, 3. 83:

「ヘイロタイから自由人へと解放された人々をラケダイモン人はネオダモデイスと呼ぶ」

Suidas, s. v. neodamodeis：

「ネオダモデイス：ラケダイモン人と並ぶ自由人」

ネオダモデイスは古注によればヘイロタイ身分から自由身分への上昇を約束する制度ということになる。ただその劣格性は戦場においてラケダイモン人部隊に編入されず、独自の編成部隊として扱われていることに示される。史料上は長期の出征を意味する都市の守備や遠隔地への遠征に動員されていることがしばしば証言されている。そしてこれらの軍役には指揮官や高級幕僚として若干のスパルタ市民が就いているに過ぎない。

彼らが土地を持たない傭兵に過ぎなかったのか、古山が提案する常備兵だったのか、いずれも推測の域を出ない。Misthos としての手当は蓄えを残せるほどの額ではなく、日々の食料を購入するだけで消えていく程度のものであったであろう。たしかに古代ギリシアにおいて常備軍的な性格を持つ部隊は存在したが、それはテーバイの神聖部隊であって、エリート部隊である。ネオダモデイス部隊のように戦場において決定的な打撃力を期待されていない部隊をポリスが長年にわたって抱えておくということは考えられない。

彼らは住所登録の自由を認められたという

古山は土地を持たない常備軍兵士と位置付ける。

しかし、ネオダモデイスが土地を持たない純然たる常備軍兵士ということを示す証拠はない。

ティブロン遠征軍の「ペロポネソス兵」が傭兵であるということを示す証拠もない。

アテナイの騎兵は傭兵ではない。

1 ダレイコス=20 ドラクマ

小アジアで招集された兵は傭兵というよりも、市民兵という印象が強い。

アゲシラオス遠征軍のネオダモデイスも傭兵かどうかは確実ではない。

ペロポネソスの同盟軍が招集されているのを見ると、ネオダモデイスが傭兵ということをサポートするものではない。

そもそも傭兵としての給与のみで生計が成り立つのだろうか。旧キュロス軍に提示したひと月1ダレイコスは20ドラクマにすぎず、兵がひと月暮らしていける金額にしか過ぎない。

旧キュロス軍の兵士は土地を持たない兵士ではない。彼らはそれぞれ故国に土地を持つ市民であった。

ヘイロタイがネオダモデイスとして自由身分を得たとしても、彼らがそれまで耕作していた土地から切り離されるということになるのか。従来通り、スパルタ市民の土地を耕作し地代貢納の義務を負い続けるということは排除されるのか。彼らが解放されるのはヘイロタイ身分からであり、農民としての階級からではない。

それにクラロス耕作する農民を喪失することはそれを所有するスパルタ市民にとっては損失となろう。むしろ自由民となったネオダモデイスから年貢を徴収し続けるほうが得策であろう。

つまり、旧ヘイロタイが農民として旧主人の土地を耕作し続け、自由民としてヘイロタイが住む農村部に生活していることこそスパルタに社会的安定をもたらすことにならないだろうか。

スパルタにとって安全弁。スパルタに忠実な住民層。

それ故、レウクトラ以降も社会層としてスパルタに存続し得た。

レウクトラ以降、スパルタは傭兵への依存を高めていく（その資金を得るためにアゲシラオスは傭兵としてエジプト王に仕えたのでは

なかったか)。

ヒュポメイオネスとは異なって、その数は前4世紀初頭において少なくとも3,500名以上を数え、これが少ないか多いかは別として、減少していくスパルタ市民に匹敵するかあるいはこれを凌駕する数字である。

初期においてスパルタ政府が長期にわたる海外遠征に数多くのネオダモデイスを参加させたのは、彼らの潜在的危険性を排除しておこうとする側面を持っていたと考えられる。彼らのスパルタに対する忠誠が証明された後期になると、国内に残置してヘイロタイを宥めておくのに活用されたとも考えられる。つまりレウクトラ以降ネオダモデイスという集団が消滅したのではなく、国内に存続し続けたと考える

モタケス (Athen. 271e-272a)

「(271e) ラケダイモンの人々からモタケスと呼ばれる人々は、ラケダイモン人ではないが、自由人であり、彼らについてピュラルコスが『歴史』十五巻の中で次のように語っている。「モタケスはラケダイモン人の乳母兄弟である。というのは市民たちの子供のそれぞれが、自らの資産が許す限り、ある人々は一人を、またある人々は二人を、さらにある人々はもっと多くを、自分たちの乳母兄弟にするのである」と。(271f) ラケダイモン人ではないが、自由人であるモタケスは、すべての教育に与るのである。リュサンドロスがこれらの人々のうちの一人であり、彼は勇敢さゆえに市民となり、アテナイの人々を海上で打ち負かしたと彼は言う。プリエネのミュロンは『メッセニア史』2巻の中で「しばしば、ラケダイモン人は奴隷を解放し、この人々をアペタイ (解放されたもの) とか、アデスポタイ (主人を持たざるもの) とか、エリュクテライ (独立したもの) とか呼び、その他にデスポナウタイ (主人を持つ船乗り) とか、この人々は艦隊に勤務した、ネオダモデイス (新区民) とか呼んだが、(272a) ヘイロタイとは違う人々だと彼は言っている。」

Aelian. *VH.*, 12. 43 :

「カッリクラティダスやギュリッポスそれにリュサンドロスはラケダイモンにおいてはモタケス（乳母兄弟）と呼ばれた。それでそれが金持ちたちの奴隷に対する名称であり、親たちは息子とたちと一緒に訓練を受ける者たちを体育教練に送り出したのであった。かのリュクルゴスは子供たちの中でアゴーゲーに耐えた者たちにラコニアにおける市民権を与えることを認めたのであった。」

Plut. Lys. 2. 1:

「リュサンドロスの父アリストクレイトスは王家の出身ではなかったが、ヘラクレスの一族だったと言われている。リュサンドロスは貧窮の中で育てられ、他のものと同じように、慣習には従順に従い、男らしく、榮譽を与えられ成功を収めた人々に立派な行為がもたらすものを除いて、あらゆる快樂を抑制していた。それに屈することはスパルタの青年にとって不名誉なことではない。」

Harpokration s. v. mothon:

「ラコニアの人たちは自由人と一緒に暮らす小僧（奴隷のこと：訳者）をモトネス（厚顔無恥な連中：訳者）と呼ぶ。」

Schol. Aristoph. Plout. 279:

「ラコニア人は自友人と一緒に暮らす小僧をモトネスと呼ぶ。」

Schol. Aristoph. Equ. 634:

「というのはラコニア人は自由人と一食暮らすものをモトネスと呼ぶ。」

Hesych. S. v. mothakes:

「息子と一緒に育てられる奴隷の子供たち。」

Hesych. S. v. mothonas:

「一緒に生活する者たち。パイディスコイ（少年奴隷）と呼ばれる者たち。」

Etym. M. s. v. mothon:

「アテナイ人がオイコトリプス（子飼い奴隷）と呼んでいるのに対して、ラケダイモン人たちは家で生まれた奴隷をそのように呼んでいる。」

アテナイオスによると、モタケスはラケダイモン人ではないが、自由人

に属するということである。元々の出自がヘイロタイであり、富裕なスパルタ市民の子弟の同伴者としてアゴーゲーと呼ばれる教育課程を修了し、モタケスという自由人身分に移行した人々ということになる。問題になるのはこのモタケスの代表的人物としてカッリクラティダスやギュリッポス、リュサンドロスといった歴史上よく知られている人物を挙げているということであろう。リュサンドロスの例に従えば、勇敢さ (*andragathia*) の故に更に市民権を与えられてスパルタ市民団に迎えられたということになる。それに対してアイリアノスはアゴーゲーの課程をすると制度的に市民権を与えられて市民団に入っていたということになる。そうするとモタケスとはスパルタ市民の中のヘイロタイ出身者という出自を示す言葉になる。どちらが正しいのかという問題に入る前にそもそもヘイロタイ出身者という前提が妥当なのかを検討しておかなくてはならない。

モタケスの例としてリュサンドロスなどの歴史上の有名人を含めていることが問題であるように思われる。プルタルコスがリュサンドロスとヘラクレイダイの末裔であると言う。プルタルコスはリュサンドロスが貧しい中で育てられたが、アゴーゲーを受けたと記している。キーワードは「貧しさ (*penia*)」である。しかし「貧しさ」はリュサンドロスがヒュポメイオネス身分に属していたという証拠にはならない。何故なら「貧しさ」はリュサンドロスの全生涯につきまとう言葉であるから。せいぜいリュサンドロスが貧しいスパルタ市民に属していたと解釈できるだけである。

リュサンドロスが有力者に柔順であったのは本人の性格によるのか、アゴーゲー教育の賜物なのか、それとも政治的打算の産物なのかは分からない。リュサンドロスがナウアルコスに任命され、アテナイのハルモステスとなったのはエウリュポン家の王アギスとの関係を想定させるものではある。貧しい家の出のリュサンドロスが政治的に栄達を遂げ、強い政治的影響力を保持するためにはアギス王のような有力者との連携、支援を必要としていたであろう。

リュサンドロスやヘイロタイから自由身分（非ラケダイモン人）に解放された人をモタケスと呼び、そのモタケスからスパルタ市民に上昇していく者が出たのか、それともアゴーゲーを修了したヘイロタイはスパルタ市

民に加えられモタケスと呼ばれたのかということを考えなければならぬが、スパルタ市民への上昇はカッリクラティダスなどやギュリッポス、リュサンドロスをもタケスとすることによって考え出されたことなのかも知れない。

カッリクラティダスやギュリッポス、リュサンドロスについてはモタケスという古注アテナイオスやアイリアノスに従わず、その範疇から除外しておき、おく。スパルタ市民の子弟と共にアゴゲーを受けることによってヘイロタイから解放された自由民身分にモタケスと呼ばれる人たちが居り、彼らはペリオイコイとは違って解放された人をモタケスと呼ぶのかどうかについては判断を控えておきたい。同時にヒュポメイオネスの子弟にアゴゲーを受けさせることによってモタケスとしたという考えについても判断を控えておく。

どちらにせよ問題は経済的な側面が解決されない限り、スパルタ市民としての地位を保つことができないからである。十分なクレーロスの支給がなければ共同会食の費用を負担することができず、市民身分からの転落を結果することになる。史料からはこの点が判然としない。ポリスが新市民にクレーロスを支給するか、個人がクレーロスを分与するかしなければ新市民の経済基盤は形成されない。

従ってモタケス身分の定義については今のところ控えておきたい。この件についてはもう少し考察してみたいと考えている。本講で重要なのはモタケスとスパルタの帝国支配との関係についてである。モタケスという制度が劣格身分からの上昇を意味しているとすれば程度の差はあれ劣格者の体制への不満を軽減する機能は有していたと考えられる。

今ひとつの問題はスパルタが動員する軍へのモタケスの関与である。ネオダモデイスについては独立した部隊を編成して守備隊として遠征軍の構成部隊として登場してくる。しかしモタケスについてはそのような記述はない。あるいはスパルタ市民としてラケダイモン人の範疇には組み込まれなかったと判断する。彼らの部隊編成や動員について史料に言及がないのは彼らの集団としての規模がそれほどでは部隊に編入されているので特記する必要がなかったことの反映であろう。ただヘイロタイ身分からの

上昇のひとつの例としてモタケスへの上昇という道があったということに留めておく。のかもしれないが、何れにしても彼らのプレゼンスは分かっている。

古山はモタケスを「兵力供給源として常時当てにされる層ではなかった」と指摘しているが、妥当な意見である。

モタケスにしろ、ネオダモデイスにしろ、古注はその出自をヘイロタイに求めている。かしモタケスに関しては、プルタルコスが述べているように、古注が言うようなヘイロタイを想定させるものではない。「貧窮」という言葉がヒュポメイオネスを意味するのかどうかは分からない。またリュサンドロスが本当にモタケス身分だったのかも分からない。リュサンドロスの弟がナウアルコス職に就任していることはこの問題に関するひとつの手掛かりを与えている。モタケスがヒュポメイオネスにせよ、ヘイロタイにせよ、劣格身分から市民身分への上昇を示しているのではないだろう。

トロフィモイのクセノイ・スパルタ市民のノトイ (Xen. *Hell.* 5. 3. 8-9.)

「(8) 事件を耳にすると、ラケダイモン人によって評議が行われ、勝利を取めた者たちの野望を鎮めこれまで行われてきたことが無駄にならないように、十分な規模の軍勢を派遣すると決定されたのであった。このように決定すると、司令官として王のアゲシポリスを、そして彼と一緒にアゲシラオスがアジアに遠征した時のように 30 名のスパルタ市民を派遣したのであった。[9] 彼に多くの者が、とりわけペリオイコイの中でエリート階層 (カロイ・カガトイ) の志願兵たち、養い子 (トロフィモイ) と呼ばれる人々の外国人 (クセノイ)、スパルタ市民の庶子 (ノトイ) たちが従軍したが、この人たちは容姿において大いに優れポリスにおいて十分に経験を有していた。さらに同盟諸都市からの志願兵たち、テッサリア人の騎兵、アゲシポリスと近づきになりたいと望んでいた人々、さらに以前よりも熱心にアミュンタスやデルダスが遠征に参加したのだった。アゲシポリスはこのような状況下でオリュントスに向けて進軍したのであった。」

トロフィモイ

在留外国人エリート

スパルタ心酔者

数はそれほどでもないだろう

亡命者はそこには含まれないだろう

重装歩兵として参加（志願兵）・・・正規の成員ではない

【参考文献】

古山正人、「ネオダーモーデイス ―ヘイロータイの解放と軍役―」

『西洋史研究』13（1984）、53-77。

同　　、「モタケス、トロフィモイ、スパルティアタイのノトイ

―スパルタの少社会集団―」『歴史学研究』597（1989）、1-18。